

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2016.12) 平成28年度:37-38.

がんの外来化学療法を受ける患者の気付きと必要な看護援助

内山 愛菜, 大谷 莉乃, 小川 碧友

がんの外来化学療法を受ける患者の気がかりと必要な看護援助

内山愛菜 大谷莉乃 小川碧友

(指導：濱田珠美)

緒言

がんは昭和 56 年から我が国における死亡原因の第 1 位となっており、死亡総数の約 1/3 を占めている。また、現在では一生涯に罹患する者の割合は 50% を超えており国民の健康上で最も大きな問題の 1 つとなっている。加えて、がん化学療法は 1980 年代以降急速に発達し、近年では様々な要因により外来での化学療法施行が増加している。

先行研究では、がん患者の気がかりや求めている看護援助についての質的分析が始められているが、完治または根治を目指す手術前後の補助療法目的のがん外来化学療法を受けている患者の気がかりは明らかになっていない。そのため本研究では、がんの外来化学療法を受ける患者の気がかりと必要な看護援助を明らかにすることを目的とした。これにより、患者のニーズに沿った看護を展開し、患者がより安心して外来化学療法を受けることが期待できると考えた。

方法

研究対象：A 病院で完治または根治を目指す手術前後の補助療法目的のがん外来化学療法を受けているパフォーマンスステータス (PS) 0~1 の 20 歳以上の男女 15 名程度。

データ収集方法：無記名自記式質問紙を用いた調査。質問用紙の配布と研究目的・内容の説明は文書及び口頭で研究者が行い、質問用紙の回収は切手貼付済みの封筒を渡し、回答後郵送返信を受けた。

調査内容：対象者のうち、研究に同意された方に対して、①現在外来化学療法を行いながら生活している中で気がかりを 3 つ、②それに対して求める看護援助を各々 3 つずつ質問用紙に記載して頂いた。対象者の背景として年齢、性別、がんの種類、通院時間、交通手段についても記載欄を設けた。

データ分析方法：質的帰納的分析方法を用いて以下の手順で行った。

- ① 外来化学療法を受ける患者のうち回答した者の気がかりをコード化した。
- ② コード化したものを意味内容の類似性にしたがってカテゴリー化した。
- ③ 必要とされる看護援助についても上記と同様にカテゴリー化した。

【用語の定義】

・がん患者：がん腫と肉腫を含む悪性腫瘍と診断され、研究協力施設において外来で化学療法を受けている患者。

・外来化学療法を受けている患者：外来にて悪性腫瘍の化学療法を行い、完治または根治を目指す手術前後の補助療法目的の患者。

・気がかり：患者ががんと向き合い化学療法を受けることで起こってくる生活における不安、治療から生じる身体・心理・社会的戸惑い、困難性の認知。

倫理的配慮：本学倫理委員会の承認を受けて実施した (承認番号：16073)。調査依頼と実施にあたり、

対象者に対して研究内容と方法、予測される利益と不利益、匿名性の確保、自由参加であることについて、文書および口頭で研究者が説明した。

結果

対象者 24 名に配布し 16 名から回収した (回収率 66.7%)。うち有効回答は 15 通であった (有効回答率 93.8%)。年代は 30~40 代の若年者 4 名 (26.7%)、50~70 代 11 名 (73.3%) であった。性別は女性 14 名 (93.3%)、男性 1 名 (6.7%) で、がん腫は乳がん 14 名 (93.3%)、直腸がん 1 名 (6.7%) であった。通院手段は、自家用車 10 名 (66.7%)、公共交通機関 3 名 (20.0%)、家族による送迎 2 名 (13.3%) であった。平均通院時間は 60.7 分であった。

1. 記載された気がかり (表 1)

対象者が記載した内容は 33 件 (100%) であり、それを分析した結果、16 サブカテゴリ、6 カテゴリが生成された。以下、カテゴリを【 】、サブカテゴリを < >、記載された内容を「 」で示す。最も記載された気がかりは【治療】【再発】であり、78.8% を占めた。

1) 【治療】

このカテゴリは 22 件 (66.7%) からなり、10 サブカテゴリが含まれた。例えば、<副作用> や <体力の低下> から構成され、「副作用も色々あって考えると心配」「体力が落ちている」などが含まれた。

2) 【再発】

このカテゴリは 4 件 (12.1%) からなり、1 サブカテゴリが含まれた。例えば <再発> から構成され、「再発の不安」「再発のことが一番気がかり」などが含まれた。

2. 求められる看護援助 (表 2)

対象者が記載した内容は 25 件であり、それを分析した結果、9 サブカテゴリ、7 カテゴリが生成された。以下、カテゴリ、サブカテゴリを 1. と同様に示す。最も記載された求める看護援助は【親身で個別性のある対応】【知識の提供】【肯定的な態度】【心配・不安の傾聴】であり、88.0% を占めた。

1) 【親身で個別性のある対応】

このカテゴリは 10 件 (40.0%) からなり、2 サブカテゴリが生成された。例えば、<親身で個別性のある対応> <助ける> から構成され、「その都度不安なことに適切に支援してくれること」「心配に思っていることを聞くと親切に教えてくれる」などが含まれた。

2) 【知識の提供】

このカテゴリは 5 件 (20.0%) からなり、2 サブカテゴリが生成された。例えば、<副作用の知識提供> <再発予防の知識提供> から構成され、「副作用による体調の変化に対して日常生活で改善できる方法を教えてほしい」「がんを再発しないための日常生活について」などが含まれた。

表 1: がんの外来化学療法を受ける患者の気がかり

カテゴリ	サブカテゴリ	件数(%)
【治療】	<副作用>	6(18.2)
	<体力の低下>	4(12.1)
	<脱毛>	3(9.1)
	<抗がん剤の効果>	2(6.1)
	<治療の部位>	2(6.1)
	<副作用への対処>	1(3.0)
	<手術後の創部痛>	1(3.0)
	<治療時間の長さ>	1(3.0)
	<事前の準備>	1(3.0)
	<不眠・疲労>	1(3.0)
カテゴリ総計		22(66.7)
【再発】	<再発>	4(12.1)
カテゴリ総計		4(12.1)
【治療費】	<治療費>	2(6.1)
カテゴリ総計		2(6.1)
【緊急時の対応】	<緊急時の対応>	2(6.1)
カテゴリ総計		2(6.1)
【家族】	<介護>	1(3.0)
	<夫の負担>	1(3.0)
カテゴリ総計		2(6.1)
【交流ができないこと】	<交流ができないこと>	1(3.0)
カテゴリ総計		1(3.0)

表 2: がんの外来化学療法を受ける患者が求める看護援助

カテゴリ	サブカテゴリ	件数(%)
【親身で個別性のある対応】	<親身で個別性のある対応>	9(36.0)
	<助ける>	1(4.0)
カテゴリ総計		10(40.0)
【知識の提供】	<副作用の知識提供>	4(16.0)
	<再発予防の知識提供>	1(4.0)
カテゴリ総計		5(20.0)
【肯定的な態度】	<肯定的な態度>	4(16.0)
カテゴリ総計		4(16.0)
【心配・不安の傾聴】	<心配・不安の傾聴>	3(12.0)
カテゴリ総計		3(12.0)
【迅速な処置】	<迅速な処置>	1(4.0)
カテゴリ総計		1(4.0)
【信頼関係】	<信頼関係>	1(4.0)
カテゴリ総計		1(4.0)
【事前準備への示唆】	<事前準備への示唆>	1(4.0)
カテゴリ総計		1(4.0)

考察

本研究は9割以上が乳がん患者であったが、その患者の年齢層はその疾患の割合に沿う形となり、集団の特性を概ね反映していると考えられた。

完治または根治を目指す手術前後の補助療法目的のがん外来化学療法を受けている患者は、副作用や再発に関する気がかりを多く記載し、「親身な対応」「明るく笑顔で接すること」「知識の提供」といった援助が望まれていることが明らかとなった。患者は気がかりを抱えているものの援助によって自らの治療に前向きに取り組もうとしていたと考えられた。先行研究では「患者は辛さや不安などを抱えてはいるが、周囲からの支えを力にして、前向きな気持ちを作り出して治療を継続していると言えよう¹⁾」とあり、これと一致していた。また、30代~40代の若

年者では脱毛に関する気がかりが多く記載されたことから、母親や妻として、社会との関わりが多い時期であり、自身の外見に関心を寄せている割合が高いことが考えられた。そのため、看護師は上記のようなケアに加え、若年者では特に外見に関する気がかりに対しての援助が必要であることが示唆された。

今回、質的に分析を行ったことで、「緊急時の対応」についての気がかりなど、がん化学療法気がかり評定尺度 (CCRS)²⁾の項目にはない気がかりが抽出された。今回の対象者の平均通院時間が「60.7分」であり、全道平均(夏期)の「26.4分」³⁾を上回っていたことにより、遠方からの通院が多いと推察され、気がかりとして緊急時の対応に不安を抱いていると考えられた。一方で、CCRSの項目の一つである「自己存在」に関する気がかりが記載されなかったことから、看護師による意図的な声掛けが必要であると考えられた。したがって、様々な患者の気がかりをどのようにくみ取るか、また一人ひとりに対する個別的な援助を行うことが重要であるということを再認識した。

今回、外来で化学療法を受けている患者を対象としたため、入院患者と比べ、多様な役割を担いながら生活しており、日常生活や家族負担に関する気がかりが多く記載されたのではないかと考えられた。

以上より、看護師は患者との関わりの中で、患者の気がかりを把握し、看護師による援助を力にして、前向きな気持ちで治療を継続していただけるような働きかけをすることで、患者がより安心して外来化学療法を受けることが期待できると考えた。

結論

本研究では、副作用や再発に関する気がかりが多く、そのうち若年者では脱毛に関する気がかりが多く記載された。また、「親身な対応」「明るく笑顔で接すること」「知識の提供」といった援助が多く望まれ、それらが完治や根治を目指す力に変える看護援助になることが明らかとなった。

研究の限界

本研究では、がん腫を限定せずに実施したが、結果として乳がん患者が多く、幅広いがん腫の患者の気がかりや求める看護援助を明らかにすることはできなかった。今後、対象者を増やすことで一般化することができると考える。また、質問用紙を用いた研究であったため、患者は自己存在についての気がかりに思い至らなかったと推察する。今後、インタビュー形式で実施することで、より具体的な気がかりが語られると考える。

謝辞

本研究実施にあたり、調査にご協力いただいたA病院にて外来化学療法を受けている対象者の皆様、および看護部長、当該科看護師長・看護師の皆様、並びにご指導いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 柘植美樹, 佐田朋美, 安藤恵美子 (2014): 外来通院により化学療法を受けている患者の気持ち, 第44回(平成25年度)日本看護学会論文集 成人看護II, 39-42
- 2) 石田順子, 石田和子, 狩野太郎他 (2004): 外来化学療法を受けている乳がん患者の気がかりとその影響要因, 群馬保健学紀要, 25, 41-51.
- 3) 北海道開発局 開発調査課 (2012): 地域の医療過疎化に対応した広域医療サポートに関する基礎調査